大津漁業協同組合が回収した外来魚

特集

ALIEN SPECIES

外来生物

つれてこられた生き物たち

外来生物は移入生物ともよばれ、人の手を介して自然の分布域の範囲をこえて移動させられた生き物です。そのうち、野外で世代をくりかえすようになったものを、帰化生物とよぶこともあります。最近、外来生物に関する話題が、マスコミ報道をにぎわしています。そのため「外来生物は問題だ」との印象をいだく人も少なくないでしょう。しかし、外来生物とわたしたちとの関係は、それほど単純なものではありません。

1 農作物も家畜も外国起源

人間もほかの動物と同様、さまざまな生き物にたよって生きているという事実を、わたしたちはあまり実感しません。でも、たとえば、日々生きていくうえで不可欠な食べ物がすべて生き物に由来することは、少し考えればわかります。農作物や家畜のうちおどろくほど多くの種類は、もともと身のまわりの自然にはいなくて、わたしたちの祖先が利用するために持ち込んだもの、つまり「外来生物」です。日本人の主食となる米をみのらせるイネは熱帯地方が原産の植物ですし、いろいろな国内品種が知られている牛や鶏などの家畜・家禽も、もともと日本の野山にいた野生の動物ではありません。

今のわたしたちの生活は、外来生物に大きく依存しているのです。遠いむかしから、わたしたちは衣・食・住にかかわるさまざまな局面で、生き物を積極的に利用してその恩恵を大きく受け、いつしかそうした役にたつ生き物なしには、生きていけなくなっています。こうした生活をささえてくれる生き物たちは、地域から地域へと人を介して伝わり、また新しい土地へ移るときに人とともに広がっていったのです。

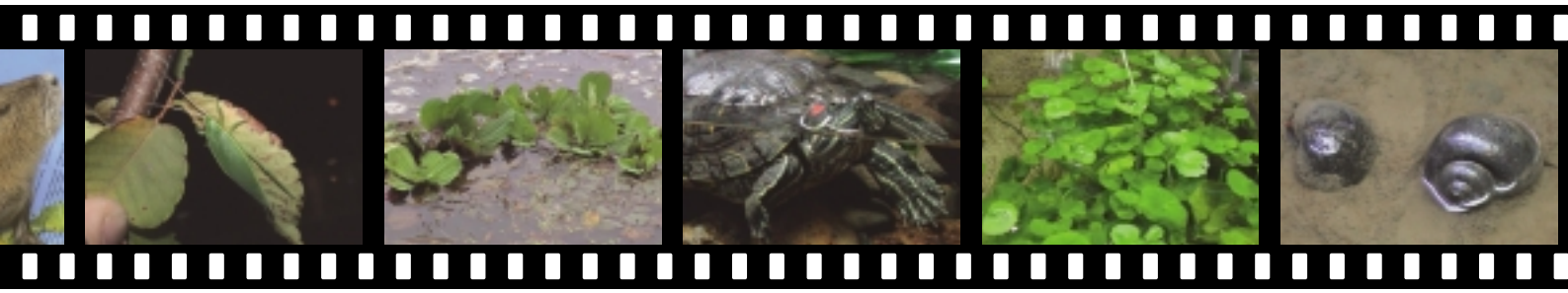
2 里山は外来生物の宝庫

つぎに、身近にいる動植物を見わたしてみましょう。里山をはじめ、わたしたちの原風景ともいえる景観をおりなす動植物のなかには、外国起源のものが数多く含まれています。春の訪れをつげる青く可憐（かれん）なオオイヌノフグリや、秋の彼岸のころ田んぼのあぜを赤くいろどるヒガンバナなど、季節感ゆたかな野の花のうちかなりの種類が帰化植物です。田園風景でおなじみのスズメやモンシロチョウなど、古い時代に日本に渡来した帰化動物と考えられるものも少なくありません。

はるかむかしに帰化した動植物のなかには、特定の目的でもちこまれたもの以外に、人知れずしのびこんだものも多いと考えられます。長年にわたって人間活動の影響を適度に

主任学芸員
中井　克樹
（魚類生態学）

日本に来たブルーギルの故郷、米国アイオワ州グッテンバーグにて。ミシシッピー川本流で採集した魚はほとんどオオクチバスだった。



受けながら持続的に保たれてきた二次的自然の生態系は、外来生物を含みながらも、比較的安定して維持されてきたのかもしれません。

3 次々に侵入する生き物たち

明治になって長い鎖国が解かれて以来、日本は海外との交流が活発になりました。とくに戦後は、世界有数の経済的発展をとげるなか、食料や原材料など多岐にわたる資源を外国からの輸入にたよる傾向を強めていきました。それはまた、非常に多くの動植物の侵入機会を増やすことにつながり、定着に成功する外来生物の種数は飛躍的に増加しました。

さらに、いろいろな目的のために生きたままの動植物の輸入も多くなりました。湖沼や河川へは、新たな資源の開発をめざし、ヨーロッパや北アメリカ、アジアから魚介類が続々と持ち込まれました。戦前に食用のため導入されたウシガエルは、そのエサとして期待されたアメリカザリガニとともに、いまでは各地の水辺でわがもの顔です。オオクチバスも、「釣ってよし、食べてよし」の魚として、大正時代に放されたのが最初でした。

農業の現場では、農作物は言うにおよばず、害虫の天敵（昆虫など）の有用性も注目されてきました。最近では、緑化のための植物や、花粉媒介のための昆虫など、自然や環境により配慮しながら効率を高めようと、外国産の動植物を積極的に利用する事例もみられます。

生活にゆとりが生まれ、価値観が多様化するなかで、わたしたちが飼育する犬や猫などの動物も、使役動物から愛がん動物、さらには伴侶（はんりょ）動物（コンパニオン・アニマル）というふうに、かかわり方が変わってきました。また、輸入される動物の種類もじつにバラエティゆたかです。いまやほぼ全国に広がったアライグマも、一時期ペットとして大量に輸入されてそれが逃がされたのがきっかけです。ペットショップの店頭には、世界各地から輸入された、愛好家や子どもたちにとって魅力あふれるカブトムシやクワガタムシが並ぶようになりました。かつて禁止されていたこれらの昆虫の輸入は、最近になって制限がとかれたのです。

4 「よそもの」だから厄介もの？

外来生物の「問題」がよく報じられるため、「外来生物は厄介もの」だと思われがちです。しかし、これまで紹介したように、ひとくちに外来生物といっても、身近でなじみ深いものや、わたしたちが大きく依存するものも多く、厄介ものばかりではありません。

それでもなお、人間の管理をはなれた特定の外来生物が、問題を引き起こすことも事実です。マングースやオオクチバスは増えすぎて、餌となる動物を食べること（捕食）が問題視されています。緑化植物のシナダレスズメガヤは、河原に侵出し他の植物の生育場所をうばう（競争）うえ、川の地形を変えてしまう危険もあります。タイワンザルや大陸産クワガタムシは、在来の種類と交配してその独自性を失わせることが危惧（ぐ）されています。

また、人間に直接に迷惑をかけたり危害を加えたりする外来生物もいます。農林水産業の対象となる生物に被害をあたえる外来生物は、さまざまな害虫をはじめ多々あります。ペット動物のなかには、人畜共通感染症（ズーノーシス）をもたらし、人間の健康をおびやかす心配のあるものもいます。

このようにめだった影響のある外来生物は「侵略的外来種」とよばれ、特定の種類・地域を対象にして、影響をやわらげるため排除が試みられるようになってきました。

ここで気をつけてほしいのは、こうした排除がおこなわれる理由が、その対象が外来生物という「よそもの」だからではなく、あくまでも影響を放っておけないからだということです。同じような生物の管理は、増えすぎた在来生物に対しても行われることを考えれば、おわかりだと思います。つまり、最近よく報じられる外来生物への対策は、「よそものをすべて排除しよう」という排外主義ではなく、あくまでも自然のバランスや地域の人びとのくらしなど、守りたいものを保護・管理する

ための理念に裏づけられたものなのです。

5 これからどうすればいいのか？

滋賀県では釣った外来魚の再放流禁止を含む新しい琵琶湖ルールが施行され、環境省も移入種に関する法案を今年度中に整備するための準備を進めるなど、外来生物に対する関心も、これまでになく高まってきています。実際のところ、外来生物に対しては、どのように取り組んでいけばいいのでしょうか。

すでに定着してしまった外来生物に対しては、その影響の度合いに応じて対策を決めていくことが現実的かつ合理的です。とくに影響が心配される種類については、分布がさらに広がらないような手だてを講じることも大切です。いっぽう、新しい生物が侵入することは、できるかぎり未然に防ぐことがもっとも確実な対応です。しかし、現実は、決まった目的のため特定グループの生物は輸入が制限されていますが、その網にかからない多くの生き物は国内に簡単に持ち込め、国内の生き物の移動もほとんど自由なのが現状です。

外来生物がもたらす数々の不幸な事例から、わたしたちは数多く学ぶ必要があります。なかでも「生き物は・いいとこどり・ができない」ことは重要です。生き物を利用する場合、どうしてもプラスの効用ばかりに期待しがちで、マイナスの副作用についてはあまり考えおよぶことがありません。特定の外来生物への対応をめぐって人びとが対立するのも、まさに効用と副作用とのぶつかり合いです。

外来生物への取り組みの基本が「予防的原則」にあることは、強調しすぎることはないでしょう。それは、外来生物の侵入・拡大や定着だけでなく、それらが増加し被害をおよぼすことを含め、あらゆる事態の悪化を未然に防ぐために努力すべきだとする指針です。つまり、意識の外に追いやろうとしがちな「縁起でもないこと」をできるかぎり想定することが、今のわたしたちに求められているのです。

わたしたち人間は、自然環境や野生生物に対して不自然なまでに強力な影響を及ぼすようになってしまいました。そうした行き過ぎへの反省から、自然環境をできるかぎり損なわずに将来に引きつげるよう、配慮し始めています。さまざまな外来生物の問題に対しては、どのように責任をとるべきなのでしょう？　好きこのんでやってきたわけではない「つれてこられた生き物たち」を、問題があるとして排除するのは、とても身勝手に思えます。だからといって、わたしたちがしでかした不始末を放置することは、影響を受ける自然や生き物に対しても、将来の世代に対しても無責任です。それでもなお、しばしば駆除をともなう外来生物への対策は「生命をどう考えるのか」という深刻な課題をも、わたしたちに突きつけていることを忘れてはなりません。

深刻な内容の話になってしまいましたが、これは今年度の琵琶湖博物館企画展「外来生物　つれてこられた生き物たち」の案内記事でもあります。これまでにない「問題を考える」ことをテーマにしたこの企画展では、当博物館で・禁じ手・であった、「～すべき」という主張も、ある程度は盛り込まれることになる予定です。連動した水族企画展でも、副題に「そのペット、あなたは飼いつづけることができますか？」とあるように、みなさんに思い悩んでいただくことになるかもしれません。

第11回　琵琶湖博物館企画展示

外来生物
つれてこられた生き物たち

7月19日(土) ～11月24日(月・振休)
場所：博物館企画展示室

琵琶湖博物館水族企画展示

外来生物
つれてこられた生き物たち
―そのペット、あなたは飼いつづけることができますか？―

7月19日(土) ～11月24日(月・振休)
場所：博物館水族企画展示室